紹介

山本武夫著『気候の語る日本の歴史』

近年の頻発する異常気象は、多くの人々に今後の生活環境に対する不安を与えているが、そうした危惧は、気象・気候に対する深い関心をよびおこしている。本書末尾の参考文献リストを見るまでもなく、最近次々とこの方面の一般向け図書が刊行されているのは、こうした人々の関心の深さ・切実さを示すものであろう。

本書は、永らく歴史時代の気候変動について、研究をつみ重ねてこられた著者が、気候変動の実態それ自体の解明から一歩進んで、それが歴史事象にいかに作用したか、という点にポイントをおいて、平明に概説されたもので、読むものをひきつけてはなさぬ興味深い内容となっている。

まず、「一 歴史時代の気候の模索」と「二 神様が少年であった頃の話」の二つの章は、導入部にあたる。京都における観桜記録を主たる手がかりとして、九～一〇世紀の温暖に対して、一五〇〇年前後の一世紀が寒冷であったらしいこと、歴史時代には、年間を通じて一世紀あたり二～三度C程度の気候変動があったとの推定を下し、そのような気候の変化が、歴史事象にも大きな影響を及ぼすであろうことを、冷害発生の確率や、海況の変化による日本列島の孤立の度合から想定している。また、特に九～一〇世紀の温暖期について、北太平洋や北米大陸北東部におけるヴァイキングの活動の例をあげて、気候の変動が、世界各地で連動して起こることを説いている。

観桜記録については、関口武「京都の桜花史料の気候学的意義」（東京教育大学地理学研究報告XIII）に、その気候学的価値についての基礎的検討がなされているが、同氏の算出した修正平均によれば、九・一〇世紀と一五・一六世紀の桜花季の差は、三日程度となっている。一方、本書では、一四種の史料にみえる九・一〇世紀の宮中花宴史料の平均と、『実隆公記』にみえる一五・一六世紀の宮中関係花季史料の平均との差を、七日としている。両氏の算出値を温度差に換算すると、一・一度C、二・六度Cとなり、その差一・五度Cは小さくない。この結果をどう理解すればよいのか判断に苦しむが、両氏の用いた史料の出入は相当はげしい。詳細は省略するが、史料の吟味は、本書の方がはるかに厳密であり、従うべきであるが、平均の算出の仕方は、関口氏に工夫がみられる。

つぎに「三 現代は過去を解く鍵」では、歴史時代の気候変動を明らかにするために、観測時代における気候変動を実証し、そのメカニズムの概略を説明する。日本の気候の長期変動は、ジェット＝ストリームの強弱変化と、気圧配置のパターン全体の北上・南下という、相互に切りはなせない二つの要素による影響の相殺・相助関係によって現出するという（図13）。また、観測時代の気候変動の分析から得られた次の二点を、「現在」が与えてくれた「過去を解く鍵」としている。第一に、日本の夏季気候は、高温―寡雨、低温―多雨の組合せで変動すること、第二に、観測時代の気温の長期上昇率は、一世紀あたり夏季〇・九五度C、冬季〇・三六度Cであること、である。

本書では、日本の気候を変動させる二つの要素は、実は盾の両面であり、ジェット＝ストリームの強弱がその平均位置の南北移動となってあらわれ、ひいては気圧配置全体の南退・北上をもたらす、としているが、それではジェット＝ストリームの強弱

変化は何に原因するのか、という点の説明がほしかった。著者は別に「気候変動から邪馬臺国を考える」（松本清張編『邪馬臺国の常識』一九七四年）を発表している。そこでは、右の二要素をさらに統括するものとして、極冠高気圧の拡大・縮小（極氷の増大・減少）をあげている（二五三ページ）。本書はこの点にまで言及しないが、これとジェット＝ストリームの強弱変化との関係、さらに極冠高気圧の変動の原因も知りたいと思う。

次に、観測時代の気温の長期上昇率については、著者の「歴史の流れに沿う日本とその周辺の気候の変遷」（地学雑誌七六―三、一九六七年）では、本書7図(A)・(B)とほぼ同じグラフを掲げた上で、その上昇率を、一世紀あたり夏季〇・四六度C、冬季〇・七四度Cとしており、本書の数値と顕著にくいちがっている。あとに刊行された本書の数値を取るべきであろうが、これだけのくい違いは不審であった。

「四　古代の気候に挑む」では、歴史時代にも気候が変動したことを証明し、その変動の仕方の特色を明らかにしている。まず、観測時代の記録や李朝の雨量観測記録を用いて、気候変動が、朝鮮半島や中国でも起こっていることを示し、中国・朝鮮・日本の気候が、「互いに内面的に関連し合ったものであって、決して個々単独に偶発するものではなく、異常気象は、近傍の年次に起こる」（一〇二ページ）という特色を指摘する。また、ローマ帝国の繁栄をもたらしたような気候変動の南北逆転現象が、日本でも見られるとする。

つぎに、二～三世紀前半について、中国・朝鮮に、飢饉や厳寒・低冷霖湿な気候を示す史料があることをあげ、日本も同様であろうとする。

さらに、『三国史記』から作成した冷涼示数の変遷を、フェアブリッジの海水準曲線や、ナイル川の洪水位の変化と比較して（図17）、冷涼示数の最も大きい二～三世紀には、ローマ＝フロリダ海退やナイル洪水位の低下が対応し、五〇〇年前後の冷涼示数の増大は、ポスト＝ローマン海進中の谷に対応することを指摘する。

また、ロットネスト海進については、「松崎天神縁起」の絵図と、「寛治三年七月源氏ノ臣三郎兵衛信慶ノ図セル越後全図ノ内湾浜部分ノ図」という二つの古図によって、日本にもこの海進があったと主張している。なお、本章ではないが、一五世紀も小氷期であることは、一五三～四ページに指摘があり、観桜記録や古日記の分析でも同様の指摘を行なっている。この小氷期には、パリア海退が対応する。

ここでは、七～八世紀の気候を問題としたい。本書では、七～八世紀前半が現代よりも寒冷であった、と考えているとみてよかろう（三六、一二六～七ページ）。それは前掲の邪馬臺国に関する論文や、「アジアの気候変動」（河野通博編『世界地誌ゼミナール1、東アジア』一九七一年）において、一層明瞭である。そこでは、奈良時代前半が小氷期であったことが明言されている（前者二六五ページ、後者八七ページ）。

その場合、論拠としては、八世紀初頭における霖雨による農業災害の発生、佐保川結氷の歌（万葉集）があげられている。前者については、霖雨が必ず低温をともなうものかどうか、私には判断できない。後者は七九・四四七八番の歌であるが、古典文学大系本頭注のように、いずれも佐保川に氷が張りつめたと解するのが素直であろうが、川岸あたりだけが凍った様を詠んだとも解しうる余地がないとはいえず、また文学的表現のこととて、なお決定的な証拠とはしがたいように思える。もし七～八世紀

前半の日本が小氷期であったとする著者の主張に従うと、後述のように、それなりに考慮しておかなくてはならない問題もあるので、史料が僅少なことを十分知りつつも、より説得的な証拠がほしいと考える次第である。

「五 小氷期気候と歴史」は、本書の中心をなす章であり、歴史時代の気候変動、とくに小氷期気候が歴史の展開に与えた影響をテーマとする。まず一八〇〇年前後の小氷期では、天明・天保の両飢饉群のあと、東北七国の人口比曲線が大きく落ちこみ、その中間でやや回復するが、これは農民騒擾件数の増減とよく対応する。また、九州の人口比曲線と東北のそれとの対比をはじめ、著者が「日本の歴史の南北シーソーゲーム」とよぶ諸事象(一五二ページに列挙)は、気候変動パターンの南北逆転の法則に由来するとする。

つぎに、一五世紀の小氷期については、土一揆の発生件数の増大がこれに対応することを示し、寛正の大飢饉の例もあげている。

さらに二〜三世紀では、「倭国大乱」の例をあげている。また「魏志倭人伝」によると、邪馬臺国と投馬国の人口が全体の約八〇パーセントを占め、邪馬臺国の経済的繁栄を示唆する記述があるが、小氷期においてかかる状態が現出しうるのは、気候変動パターンの南北逆転によると考えられるので、邪馬臺国の位置は九州と考えるのが最も妥当と主張する。ついで、「漢書西域伝」を参考にして、「魏志倭人伝」の読み方に関する見解を提示し、右の位置論を補強する。

このように、本書では、小氷期気候の歴史に与えた影響を、人口変動と土一揆や百姓一揆の発生件数とを手がかりとして考えている。そのうち、人口増加を減少と同程度に、気候変動と関連づけてよいかどうかは、検討を要するが、前述した八世紀についてみると、著者は、七〜八世紀前半を寒冷期、九〜一〇世紀を温暖期とするのであるから、八世紀は全体として気候の回復期ということになる。ところで、青木和夫氏によって歪拡大説と名づけられた岸俊男氏の籍帳記載の戸と実態としての家族との関係に関する所説は、八世紀における「人口の急激な増加」ということを前提としている(『日本古代籍帳の研究』三一九ページ)。気候の温暖化が、幾つかの媒介をへて、人口増加に結びつきうるのならば、本書の主張と岸説の前提とは、符号することになる。

また、七世紀後半は、朝鮮三国と日本における相つぐ政変、唐の介入と撤退、百済・高句麗の滅亡と統一新羅の出現など、東アジアに一連の事件が続いた未曾有の激動期であり、日本でも、律令制の成立との関連で議論の集中している、孝徳朝から天智朝をへて天武持統朝に至る時期にあたっている。このように、日本および朝鮮・中国にとって極めて重要な時期を、小氷期とそれからの回復期と規定しうるかどうかは、興味をそそられるところであり、さきにより説得的な証明を望んだのも、以上の理由によっている。

「六 鎌倉時代の年輪」と「七 古い温度計の話」の二章では、歴史時代の気候変動を明らかにする方法がいくつか紹介されている。まず、佐波川の埋木片の年輪を調べ、その成長量の多寡が、気候史料や歴史上の事件と対応していることを指摘する。つぎに、古日記から個々に降雪率を算出し、その値を斉一化してこれらを接続し、気温の長期変動を明らかにする方法を提示し、それによって、一四〇〇年代中葉に気温が低下したこと、一五世紀前半と一六世紀後半の、二・三月の平均気温差が二・四度Cで

あることを解明する。さらに、アメリカのL・M・リビー氏を中心に開発されている、^{16}Oと^{18}Oの存在比による気温決定の方法を紹介し、屋久杉を用いて明らかにされた気温変動のグラフ（図37・38）が、古日記の降雪率の変動曲線とよく対応するとする。

以上、本書の内容をごく簡単に紹介し、若干のコメントをはさんできたが、注文や疑問の提示にのみ走りすぎ、やや紹介の枠をふみこえたきらいのある点、おわびしなければならない。しかし、実のところ、私は大いなる興味を抱きつつ本書を読んだのであって、その結果、「自然」の重さをあらためて認識するとともに、その「自然」に対する「人間」の働きかけを、ますます大きく考慮に入れて歴史の展開を考えることの重要性を、やや抽象的にではあるが、本書を通じて学んだことを申しのべて、紹介を終りたいと思う。

（四六判　二四五頁　一九七六年一〇月　そしえて社〈そしえて文庫4〉一、二〇〇円）

（栗原永遠男　追手門学院大学専任講師）

篠田雄次郎著『聖堂騎士団』

テンプル騎士団或いは神殿騎士団とも訳されるこの騎士団を扱ったものとしては、既に橋口倫介氏の『騎士の城』（一九六七年、人物往来社）、『騎士団』（一九七一年、近藤出版社）があるが、この度、一般読者にもより接し易くより手頃な新書版で出たことは、この分野の邦語文献に乏しく、一般にも知られること少ない我国にあっては、甚だ喜ばしいことである。尤も、小冊子には不可避とも言える過度の簡潔化も伴う故に、対象のより良き理解のためには、橋口氏のものも併せ読むのが望ましいのではないかと思われる。

内容は、クレルモン公会議に始まり、十字軍以前の西欧とビザンティンの情勢、イスラムも含めた東西の文化格差（これは次章でも繰り返される）について述べる「東征前夜」、第一回十字軍とその動機について述べる「十字軍の東征」、騎士団の創設とその背景たる修道院改革、騎士団が影響を受けたとするアササン騎士団、騎士団の宗教的寛容・清貧・現地同化、等を述べる「近代的組織の発生」、騎士団の組織、ハッティン前夜から王国滅亡までの経過、騎士団の金融業務を述べる「聖堂騎士団の組織」、騎士団解散とその後日談及び後継団体について述べる「栄光と壊滅」の五章よりなっている。

色々な事柄が詰め込まれていて論旨を捉えにくいが、恐らく、低文化の西欧が高文化の東方と接触することにより近代へと移行し得たということ、そしてその際騎士団が媒介者となったということであろう。近代の政治・軍隊・経営諸組織への連続性の言及が到る所に見られ、騎士団を近代的組織の先駆と考える視点が本書の眼目であろうと思われる。

甚だ興味深く極めて示唆に富む。しかし、先駆という言葉は便利であるが、現象的な類似点の指摘だけでは何も意味しないだろうし、又、本書の場合、多くが騎士団から直接発展し或いは影響を受けたかの如き叙述の仕方になっているのは、問題が残るのではないかと思われる。実際に騎士団が起源になっている場合でも、競合する諸条件を無視することはできないだろうし、介在する諸段階を考慮に入れることなしには、近代との結びつきを云々することはできな